

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Pattarat Phantprasit
論文題目	The Making of Honour and Masculinity of the Siamese Army from the 1900s to 1932 (1900年代から1932年におけるシャム陸軍の名誉と男性性の形成)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、20世紀初頭から1932年までの時期の、シャム (タイ) 陸軍における名誉と男性性の構築とその変容を検討する。19世紀半ばよりシャムの仇敵であったビルマやベトナムが植民地化され平定された。こうした中で創設されたシャム陸軍は、いかに自らの存在を正当化するイデオロギーを構築したか、そしてそのイデオロギーはいかなる形で変化し、1932年の立憲革命に至ったのかという問題を、名誉と男性性という切り口から、多様な史料に基づき分析している。</p> <p>第1章では対象時期の軍と王権の関係に関する既存の研究を渉猟し、国王の果たした役割に注目する反面、軍の動きを看過しがちであり、また軍の動きを検討した研究も1932年の立憲革命など特定の政治的事件の分析が中心で、軍の存在を支えたイデオロギーとその変容に関する分析は、ジェンダーの視点も含めて不十分であったと指摘する。そして名誉と男性性に着目した本研究の意義が示される。</p> <p>第2章では、1890年代後半の改革前後におけるシャム陸軍の歴史を描き、伝統的な軍から近代的な軍への制度的変遷を概観する。19世紀末までシャムは常備軍を持たず、地方の反乱鎮圧等に動員された兵士は、国王への忠誠も規律も欠いていた。その後1893年のパークナム事件を契機に常備軍の必要性が認識され、1905年に徴兵制が導入される。並行して軍事予算の増加や組織の拡充が進められ、1920年代半ばの経済危機に至るまで増加・拡大が続いた。</p> <p>第3章では、1900年代から1920年代における軍の名誉の形成を、軍事式典と兵士に対する仏教教育の側面から分析する。徴兵制の導入後、軍に対する尊敬の念を醸成し王権への献身を強化すべく軍の名誉の概念が創出・強化されるプロセスを、国王に忠誠を誓う飲水儀礼、連隊旗への誓忠儀礼、国王への元帥捧奉呈式典を取り上げて分析する。また兵士に対する仏教教育の内容を、教科書や軍の内部報告書から考察し、特に国王に対する報恩感謝が強調され、国王を頂点とするチャート(“nation”)への忠誠が教えこまれていった。</p> <p>第4章では、徴兵された平民男性を名誉ある兵士に仕立てるための様々な方策が考察される。軍律が整備され懲罰が導入され、軍事訓練では細かな立ち居振る舞いが教え込まれた。身体的強壯は重視されなかった一方、制服の着用、清潔維持、時間厳守など礼儀作法が細かく規定され、酩酊や借金、娼婦との関係は、軍と国王の名誉を汚す行為とみなされ禁じられた。同時に大規模なスポーツイベントが開催され、イベント</p>			

を通じて、名誉ある兵士の姿は広く一般に公開された。

第5章では、「タイ歴史学の父」と称揚されるダムロン親王や軍の高官となった王族が1910年代から20年代にかけて執筆した近代的歴史叙述としての軍の歴史を分析する。いずれもアユタヤー時代に遡り、軍がシャムの独立に果たした役割と国王のリーダーシップを強調する筋立てになっており、歴史叙述は軍の存在の正当化に使われた。また軍のスポーツイベントの際、18世紀末のシャムとビルマとの戦争を模したショーが開催されるなど、歴史的重要性は広く人々にも伝えられた。

第6章では、六世王ワチラーウット（在位 1910-1925）による理想の男性像の構築とその変遷を論じる。ワチラーウットは、理想のエリート男性像として「ルーク・プーチャーイ」を示した。その後、第一次世界大戦を契機に、国のために犠牲を厭わない勇敢な戦士たる男子像「ナック・ロップ」を提起した。連合国の一員としての参戦は、シャムの兵士が世界の舞台上で諸外国と対等の地位を獲得する機会として国内でも喧伝されたが、終戦後は改めて品行方正な兵士像が強調されるようになった。

第7章は、『セーナースクサー・レ・ペーウィッタヤーサート』（『軍事学と科学普及』）を中心に、軍が発行した雑誌に掲載された記事を題材に、そこに示される男性像を検討する。同誌は民間の作家グループとの交流の場ともなり、1920年代には、台頭した都市中間層の価値観を色濃く反映した小説が掲載され、経済的困窮が題材に取り入れられ男女関係における誠実さも含めた多様な男性像が示された。一方、戦士としての軍人の政治への関与も議論されるようになった。

第8章は、1920年半ば以降、大恐慌へと続く時期における、軍の経済危機への対応と変容を検討する。軍は大幅な予算削減、人員削減、組織再編を迫られた。新聞紙上でも軍に批判的な記事が掲載され、兵士の経済的困窮も相まって、軍の人気は低下した。こうした状況に対して、軍と王権は従来国王とチャートへの忠誠、よき市民としてのモラルに加え、儉約など経済的側面も含む名誉の概念の再定義を試みたが、十分に対応することができなかった。

終章は全体の議論を要約する。1900年代以降、シャム陸軍は、外敵と戦う機会がない中、自らの存在を正当化するために軍の外部にその根拠を求めざるを得ず、その正当化のイデオロギーは時代の変化に応じて変化した。国王、仏教、チャートと結びついた名誉や男性性は、1920年代以降次第に都市中間層の価値を取り込んで変容し、さらに経済的危機の中、軍に対する批判の高まりと王権の正当性の低下とともに、軍は新たな名誉と男性性を模索することとなった。最後にこうした軍の名誉と男性性の再定義は、1932年の立憲革命後も続いた可能性を示唆して全体をしめくくる。